08 複素数とは何か?複素平面

虚数単位はiで $i^2 =$ になります。複素数はzで表し

$$\boxed{z = x + iy} \tag{8.1}$$

と表します。また、xを「zの実部 (**Real**)」、yを「zの虚部 (**Imargenary**)」といい、

実数:
$$\begin{cases} x = \text{Re}(z) \\ y = \text{Im}(z) \end{cases}$$
 (8.2)

と表します。ともに実数です。

I.複素数とベクトル

複素数での(x,y)を実軸一虚軸の図で表すと図 1a のようになります。この「実軸ー虚軸の図」を

● 複素平面

と言っています。同様にベクトルでも(x,y)を表せます。図 1a からもわかるように

● 複素数とベクトルはx-y図としては同じ

です。複素数えから

$$i \rightarrow -i$$
 (8.3)

にする操作で得られる新たな複素数を**複素共役**といい

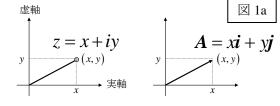


図 1b

z = x + iy

ことになります。従って

$$z^* = x - iy \tag{8.4}$$

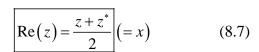
になります。 $z^* = x - iy$ は、zに $y \rightarrow -y$ を施しても、 z^* になります。つまり、

$$z = x + iy \Rightarrow \begin{cases} i \to -i \\ y \to -y \end{cases} \Rightarrow z^* = x - iy$$
 (8.5)

です。図 1b のx-y図では、 $z \ge z^*$ の関係がわかります。また、ベクトルと同じなので、図 1c の作図より

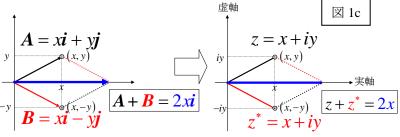
$$z + z^* = 2x \tag{8.6}$$

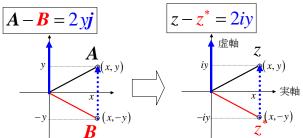
もわかり、実際、(8.4)より確かめられます。(8.2)を用いると、



同様にして、

$$z - z^* = 2iy \tag{8.8}$$





虚軸

iv

図 1d

▶実軸

2/6 平成23年3月24日午後8時10分なので、

$$\overline{\operatorname{Im}(z) = \frac{z - z^*}{2i}} (= y)$$
(8.9)

とわかります。また、原点から(x,y)への長さは $\sqrt{x^2+y^2}$ であり、複素数 z とその共役数 z^* で表すことができます。 $i^2=-1$ に注意すると

$$x^{2} + y^{2} = x^{2} - i^{2}y = x^{2} - (iy)^{2} = (x + iy)(x - iy) = zz^{*}$$
(8.10)

と計算できます。この「zの大きさ」を「ベクトルの大きさ」と同様に

- 複素数zの絶対値: |z|
- ベクトルのA 絶対値: |A|

で表して

$$|z|^2 = z^* z = x^2 + y^2$$
 (8.11)

となります。

Ⅱ.複素数と極座標

複素数zの(x,y)を極座標で表すこともでき、図 1d のようにx軸からの角度を θ とするとき

$$\begin{cases} x = r\cos\theta \\ y = r\sin\theta \end{cases} \Leftarrow r = \sqrt{x^2 + y^2}$$
 (8.12)

です。1 これを、(8.1)に代入して整理すると

$$z = x + iy = r\cos\theta + ir\sin\theta = r(\cos\theta + i\sin\theta)$$
 (8.13)

を得ます。(8.11)を用いると、|z|=rなので、(8.13)は

$$z = r(\cos\theta + i\sin\theta) = |z|(\cos\theta + i\sin\theta) \tag{8.14}$$

と計算できます。従って、

$$|z| = ||z|(\cos\theta + i\sin\theta)| = |z||\cos\theta + i\sin\theta| \tag{8.15}$$

なので、

$$\left|\cos\theta + i\sin\theta\right| = 1\tag{8.16}$$

がわかります。ここで、 $\cos\theta$ と $\sin\theta$ の $\theta=0$ でのテーラー展開(マクローリン展開)を用いる:

ュータ アルファ ベータ ガンマ 1 角度はギリシャ文字で表し、 $\overset{_{\scriptstyle \nu-\rho}}{\theta}$, $\overset{_{\scriptstyle \nu}}{\alpha}$, $\overset{_{\scriptstyle \sigma}}{\beta}$, $\overset{_{\scriptstyle \gamma}}{\gamma}$ などで表される事が多い。

$$f(\theta) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{\theta^{n}}{n!} f^{(n)}(0) \left(f^{(n)}(\theta) = \frac{d^{n} f(\theta)}{d\theta^{n}} \right)$$

$$= f(0) + \theta f^{(1)}(0) + \frac{1}{2!} \theta^{2} f^{(2)}(0) + \frac{1}{3!} \theta^{3} f^{(3)}(0) + \theta^{4} + \cdots$$
(8.17)

これを $\cos\theta$ と $\sin\theta$ に適用すると

$$f(\theta) = \cos \theta \Rightarrow f^{(n)}(\theta) = \frac{d^n f(\theta)}{d\theta^n} = \frac{d^n \cos \theta}{d\theta^n}$$

$$\begin{cases} n = 1 : \frac{d \cos \theta}{d\theta} = -\sin \theta \\ n = 2 : \frac{d^2 \cos \theta}{d\theta^2} = \frac{d}{d\theta} \frac{d \cos \theta}{d\theta} = \frac{d(-\sin \theta)}{d\theta} = -\frac{d \sin \theta}{d\theta} = -\cos \theta \\ n = 3 : \frac{d^3 \cos \theta}{d\theta^3} = \frac{d}{d\theta} \frac{d^2 \cos \theta}{d\theta^2} = \frac{d(-\cos \theta)}{d\theta} = -\frac{d \cos \theta}{d\theta} = -(-\sin \theta) = \sin \theta \\ n = 4 : \frac{d^4 \cos \theta}{d\theta^4} = \frac{d}{d\theta} \frac{d^3 \cos \theta}{d\theta^3} = \frac{d \sin \theta}{d\theta} = \cos \theta \end{cases}$$

$$(8.18)$$

$$f(\theta) = \sin \theta \Rightarrow f^{(n)}(\theta) = \frac{d^n f(\theta)}{d\theta^n} = \frac{d^n \sin \theta}{d\theta^n}$$

$$\begin{cases} n = 1 : \frac{d \sin \theta}{d\theta} = \cos \theta \\ n = 2 : \frac{d^2 \sin \theta}{d\theta^2} = \frac{d}{d\theta} \frac{d \sin \theta}{d\theta} = \frac{d \cos \theta}{d\theta} = -\sin \theta \\ n = 3 : \frac{d^3 \sin \theta}{d\theta^3} = \frac{d}{d\theta} \frac{d^2 \sin \theta}{d\theta^2} = \frac{d(-\sin \theta)}{d\theta} = -\frac{d \sin \theta}{d\theta} = -\cos \theta \\ n = 4 : \frac{d^4 \sin \theta}{d\theta^4} = \frac{d}{d\theta} \frac{d^3 \sin \theta}{d\theta^3} = \frac{d(-\cos \theta)}{d\theta} = -\frac{d \cos \theta}{d\theta} = -(-\sin \theta) = \sin \theta \end{cases}$$

$$(8.19)$$

なので、

$$\cos\theta = [\cos\theta]_{\theta=0} + \theta[-\sin\theta]_{\theta=0} + \frac{\theta^{2}}{2!}[-\cos\theta]_{\theta=0} + \frac{\theta^{3}}{3!}[\sin\theta]_{\theta=0} + \frac{\theta^{4}}{4!}[\cos\theta]_{\theta=0} + \cdots$$

$$= 1 - \frac{\theta^{2}}{2!} + \frac{\theta^{4}}{4!} + \cdots = (-1)^{0} \frac{\theta^{0}}{\theta^{0}} + \frac{(-1)\theta^{2}}{2!} + \frac{(-1)^{2}\theta^{4}}{4!} + \cdots = \cdots + \frac{(-1)^{k}\theta^{2k}}{(2k)!} + \cdots = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^{k}\theta^{2k}}{(2k)!}$$

$$\sin\theta = [\sin\theta]_{\theta=0} + \theta[\cos\theta]_{\theta=0} + \frac{\theta^{2}}{2!}[-\sin\theta]_{\theta=0} + \frac{\theta^{3}}{3!}[-\cos\theta]_{\theta=0} + \frac{\theta^{4}}{4!}[\sin\theta]_{\theta=0} + \cdots$$

$$= \theta - \frac{\theta^{3}}{3!} + \cdots = (-1)^{0} \frac{\theta^{1}}{\theta^{1}} + \frac{(-1)^{1}\theta^{3}}{3!} + \cdots = \cdots + \frac{(-1)^{k}\theta^{2k+1}}{(2k+1)!} + \cdots = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^{k}\theta^{2k+1}}{(2k+1)!}$$

$$(8.20)$$

と計算でき、

$$\cos \theta = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{\left(-1\right)^k \theta^{2k}}{\left(2k\right)!}$$

$$\sin \theta = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{\left(-1\right)^k \theta^{2k+1}}{\left(2k+1\right)!}$$
(8.21)

になります。これを、(8.13)の $\cos\theta+i\sin\theta$ に代入して

$$\cos\theta + i\sin\theta = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^{k} \theta^{2k}}{(2k)!} + i\sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^{k} \theta^{2k+1}}{(2k+1)!} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i^{2})^{k} \theta^{2k}}{(2k)!} + [i]\sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i^{2})^{k} \theta^{2k+1}}{(2k+1)!} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i\theta)^{2k}}{(2k)!} + \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i\theta)^{2k+1}}{(2k+1)!} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i\theta)^{2k}}{(2k)!} + \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i\theta)^{2k+1}}{(2k+1)!} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i\theta)^{2k}}{(2k)!} + \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i\theta)^{2k+1}}{(2k+1)!} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i\theta)^{2k+1}}{(2k+1)!} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i\theta)^{2k+1}}{(2k+1)!} + \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i\theta)^{2k+1}}{(2k+1)!} + \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i\theta)^{2k+1}}{(2k+1)!} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(i\theta)^{2k+1}}{(2k+1)!} + \sum_{k$$

なので、

$$\cos\theta + i\sin\theta = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{\left(i\theta\right)^n}{n!} \tag{8.23}$$

と計算できました。これは、 e^x のテーラー展開:

$$e^{x} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{x^{n}}{n!} \stackrel{x=i\theta}{\Longrightarrow} e^{i\theta} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{\left(i\theta\right)^{n}}{n!}$$
(8.24)

と同じなので、

$$\cos\theta + i\sin\theta = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{\left(i\theta\right)^n}{n!} = e^{i\theta}$$
 (8.25)

より

$$e^{i\theta} = \cos\theta + i\sin\theta \tag{8.26}$$

と一致します。また、(8.16)より

$$\left| e^{i\theta} \right| = 1 \tag{8.27}$$

です。これは、**オイラーの公式**と言います。また、極座標での複素数zは、(8.14)で与えられ $z=r(\cos\theta+i\sin\theta)$ なので、

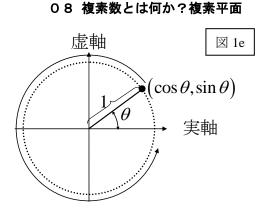
$$z = |z|e^{i\theta} \tag{8.28}$$

5/6 平成23年3月24日午後8時10分

となります。ここで、 θ の値を0から増加させていくとき、 点が複素平面で描く図形は、 $\left|e^{i\theta}\right|=1$ なので半径 1 の円に なります。図 1e の様に

なりより。図 16 の様に ● e^{iθ}の値は、**半径1の円**周上にある

ことがわかります。



Ⅲ.複素数の回転と群論

複素数zは、**エラー! 参照元が見つかりません。**に従って表すことができ、その角度を図 2a のように α とすると 図 2a

$$z = |z|e^{i\alpha} \tag{8.29}$$

と表せます。この複素数から新しい複素数 $z'=e^{i\theta}z$ を作ります。 (8.29)を用いると

$$z' = e^{i\theta} z = e^{i\theta} |z| e^{i\alpha} = |z| e^{i(\theta + \alpha)}$$
(8.30)

と計算できます。このとき、 $\left|e^{i\theta}\right|$ = 1なので、 $\left|e^{i(\theta+\alpha)}\right|$ = 1より

$$|z'| = |z| \tag{8.31}$$

になっています。(8.30)を図に表すと、角度が $\theta+\alpha$ なので、図 2b の図が描けます。従って

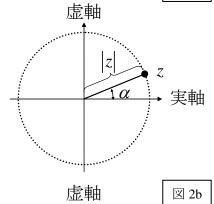
 \bullet $e^{i\theta}$ は複素数zを θ だけ**回転**させることがわかります。

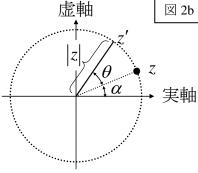
この $e^{i\theta}$ を使って「群」という概念を見てみます。「群」とは、

- どんなに変化してもその群れの中に変化したものがいる という概念です。これを数学的に定義したのは**群論**とよばれます。群の中の 1 つ 1 つを**元** (*a,b,c,d,e,f,*…で表す)といい、次の 3 つの性質を満たします:
 - 変化しない場合
 - ▶ 単位元 (e) が存在する: ea = a
 - 変化しても元に戻せる
 - **▶ 逆元 (***a*⁻¹**)** が存在する: *a*⁻¹*a* = *e*
 - 変化する組の取り方によらずに同じものに変化する
 - \blacktriangleright **結合則**が成立する: (ab)c = a(bc)
- の3つの条件で定義されます。

 $e^{i\theta}$ の場合に、元を

 $U(\theta) = e^{i\theta} \tag{8.32}$





と表すようにします。このとき、「群の中にある」というのは、

 \bullet $e^{i\Box}$ の形で書ける

ことに対応します。3つの性質は、

● **単位元(e)** が存在する

● **逆元 (***a*⁻¹**)** が存在する

$$a^{-1}a = e \Rightarrow U(-\theta)U(\theta) = e^{-i\theta}e^{i\theta} = 1 = U(0) \Rightarrow a^{-1} = U(-\theta)$$

● 結合則が成立する

$$\triangleright$$
 $(ab)c = a(bc)$

$$\begin{cases}
\left(\overrightarrow{U(\theta)} \overrightarrow{U(\alpha)} \right) \overrightarrow{U(\beta)} = e^{i\theta} e^{i\alpha} U(\beta) = e^{i(\theta+\alpha)} U(\beta) = e^{i(\theta+\alpha)} e^{i\beta} = e^{i(\theta+\alpha+\beta)} = U(\theta+\alpha+\beta) \\
\overrightarrow{U(\theta)} \left(\overrightarrow{U(\alpha)} \overrightarrow{U(\beta)} \right) = U(\theta) e^{i\alpha} e^{i\beta} = U(\theta) e^{i(\alpha+\beta)} = e^{i\theta} e^{i(\alpha+\beta)} = e^{i(\theta+\alpha+\beta)} = U(\theta+\alpha+\beta)
\end{cases}$$

となり、3つの性質は満たしています。従って、

• $U(\theta)$ は群をなす

事がわかります。これを**ユニタリ一群**(Unitary Group)といい、特に、U という頭文字を用いて

● *U*(1)群

と呼ばれています。1は

• $U(\theta)$ は1行1列の行列(=数のこと)の θ を持つ

ことを示しています。 2 量子力学で**ユニタリー**演算子U とは、

$$U^{\dagger}U = U^{*T}U = I \tag{8.33}$$

のことで、 $U(\theta) = e^{i\theta}$ は、(8.33)を満たしています(問題 $\mathbf{1}: U^{\dagger}(\theta)$ を求めよ。)。「 $U(\theta)$ の作

る群」を「**ユニタリ一**群」と呼ぶ由縁です(**問題2** : $A = \begin{pmatrix} 1 & i \\ 1 & 2 \end{pmatrix}$ より A^\dagger を作れ)。

² 2行2列の行列(θ の数が $2\times2=4$ の4つ)のときには、U(2)とかSU(2)と呼ばれます。SU はSpecial Unitary (特殊ユニタリー)の略になっています。